

新潟市水族館の管理に関する基本協定に係る 平成 22 年度 業務報告書

1. 入館状況について

平成 22 年度総入館者数 460,630 人

[総括]

平成 21 年 3 月 28 日スタートした「政府の『生活対策』に基づいた、「ETC（ノンストップ自動料金支払いシステム）車載器の塔載車に対する『休日特別割引（土・日・祝高速料金 1,000 円）』」の影響を受け、平成 21 年度は前年度と比較し入館者数が大幅に増加したが（対前年度比 109.3%）、平成 22 年度は平成 20 年度と同レベルの入館者数にとどまった（平成 20 年度総入館者数 447,512 人 対平成 20 年度比 102.9%）。

平成 22 年度もこの『休日特別割引』は継続してはいたが、政権が不安定であり、民主党のマニフェストに掲げられた「高速料金無料化」に対する期待感の希薄等もあいまって、導入時ほどの吸引力はなく、入館者数増に結び付かなかつたと考えている。

平成 21 年度は、NHK大河ドラマ「天地人」の放映、水と土の芸術祭の開催、トキめき新潟国体・トキめき新潟大会の開催、JRディスティネーションキャンペーン実施等、「新潟」がクローズアップされるイベント等が目白押しであったが、平成 22 年度は「奈良の古寺と仏像」（4 月 24 日～6 月 6 日、会場：県立近代美術館（長岡市））、「ラ・フォル・ジュルネ」（4 月 30 日・5 月 1 日）APEC 食料安全保障担当大臣会合（10 月 16・17 日）等は実施されたが、期間・会場・内容的にマリニピア日本海の入館者に結び付くようなイベントがなかったことも入館者増につながらなかったひとつの要因だと考えている。

また、夏は猛暑が続いたこと（7 月～9 月の対前年度比平均 83.4%）、夏季でもっとも多客が見込めるお盆時期に台風に見舞われたこと（8 月対前年度比 88.5%、前年度入館者数から 13,657 人減）、平成 21 年のような「9 月の大型連休（9 月 19 日（土）～9 月 23 日（祝）・シルバーウィーク）」がなかったこと（9 月の対前年度比 69.8%、前年度入館者数から 17,313 人減）、平成 21 年度より降雪量は少なかったものの、降雪日が多かったこと（1 月対前年度比 74.2%）なども、大きく影響していると考えている。

6 月 18 日に起こしてしまった日本海大水槽展示魚類等の大量死亡事故時に、「マリニピア日本海のメイン水槽である日本海大水槽が復旧する間」及び「無料入館期間終了の周知期間」である 6 月 19 日から 6 月 24 日の 6 日間を無料開館した。結果、この期間中 44,030 人もの入館者があり、マリニピア日本海へのニーズの高さを再認識することができた。

市民の貴重な財産を失ってしまったこと、無料入館を実施したことによる入館料収入の損失等、市ならびに市民の皆さんに非常に多くの負担を負わせてしまった。多大なご迷惑と心配をおかけしたことを深く反省している。

また、3 月 11 日に「東日本大震災」が発生し、その後地震に伴う「東京電力福島第一原子力発電所事故」「計画停電」等により、入館者数が激減した。3 月 11 日以降の入館者数を過去 3 力年の同時期同曜日と比較すると約半数となっている。地震の発生が、「春休み」というある程度の誘客が見込める時期の直前であったこと、来館が見込まれる近県が被災したことで、3 月の入館者数は平成 21 年度の 58.2%、平成 20 年度の 55.2%となっている。

未曾有の災害であったこと、原発事故が終息していないこと、被災エリアが広範囲に渡ること、広範囲で余震が続いていることなど、あまりにも不確定要素が多く、今後の入館者数及び入館料収入を推測していくのはかなり困難であると感じている。

入館者数増やリピーターの確保を目指し、平成 20 年 4 月 1 日から発売を開始した「年間入館パスポート（パスポート）」については、全入館者の 0.7%から購入してもらうことができた。平成 21 年度の購入者一人当たりの入館回数は 5.3 回であったが、平成 22 年度は 5.8 回と増加している。

入館者数は、「休みの連なり方」や天候によりかなり左右されるが、今後も展示や企画内容・実施時期等に工夫を凝らすことで、入館者数の増加及び平準化に努めていきたい。

申請や手帳による減免での入館者は、「身障者等施設（対前年度比 109.2%）」「老人施設（対前年度比 186.6%）」「小・中学校（対前年度比 137.5%）」「保育園・幼稚園等（対前年度比 120.1%）」と増えている。特に、「老人施設」と「小・中学校」については、平成 17 年 3 月 21 日の近隣市町村との合併以来最も減免利用者が多くなっている。

減免利用者は 25,449 人と、総入館者に占める減免利用者の割合は 5.5%となっている。平成 17 年 3 月 21 日の近隣市町村との合併以来最も多くなっていることから、当館の果たすべき社会的役割はますます大きくなっていると考えている。

開館 20 周年という節目の年となった平成 22 年度は、開館 20 周年のオリジナルロゴを作成し、印刷物・HP 等に用い積極的な意識の高揚を図った。記念メダルの根強い人気に注目し、平成 22 年度は開館 20 周年を記念したオリジナルデザインのメダルを作成・販売、また、ご当地オリジナルデザインのディズニーメダルの発売も開始した。マリニピアホールへのクリスマスツリーの設置、オリジナルカレンダープレゼント、門松の設置等、季節や行事に合わせたサービスも展開した。

毎月実施しているアンケート調査で「スタッフの対応が優しくてよかった」「以前来た時と同様に施設内がきれいだった」「ベビーカーが新しくなっていてよかった」「受付の人に無理なお願いをしたが、快く引き受けてくれてありがたかった」「駐車場警備の人の接客が素晴らしかった」「クリスマス時期のツリーがよかったので、また来館したい」等の感想が寄せられている。

売店やレストラン、自動販売機等の付帯事業についても、「子どもに食物アレルギーがあるのだが、レストランで対応してもらえてありがたかった」「売店の人にとっても優しくしてもらった」等の声が寄せられている。

今後も、常におもてなしの心を持ち「来てよかった、また来たい」と感じてもらえるようなサービス提供を心掛け、リピーターの確保に努めたい。

2. 施設の管理運営状況について

(1) 臨時開館・閉館及び開館時間の変更

[総括]

臨時開館・閉館及び開館時間の変更については、新潟市水族館条例に基づき適切に実施した。

臨時開館・開館時間の繰り上げ及び延長を行った日すべてが、年間平均入館者数を超えており、市民サービスの提供という目的を十分に果たしたのではないかと考えている。

例年実施している 1 月 2 日・3 日の臨時開館であるが、みなとトンネル開通後、人の流れが変わってきており、ここ数年護国神社への初詣客が増加し、三が日の朝早い時間からマリニピア日本海周辺が混み合うようになっていたことから、従来午前 10 時から午後 5 時までとしていた開館時間を、平成 21 年度から周辺の人出に対応し午前 9 時から午後 5 時までに変更した。開館時間の前倒しが多少なりとも周辺の混雑緩和に役立ったと考えている。

施設・設備の老朽化に伴い補修等のための施工頻度が高まっていることから、養生を伴う補修工事を集中的に行うため、電気事業法第 42 条に基づく電気設備法定点検の実施に合わせて、3 月 2 日から 4 日を臨時休館日とし、「駐車場の区画線整備」「別館の手摺りの塗り替え」「水槽周辺の壁面塗装」等を実施した。従来、「12 月 29 日から 1 月 1 日」と、「電気事業法に基づく電気設備法定点検実施のために臨時休館している 3 月の第 1 木曜日とその翌日」が休館日であったが、年末年始は基本的に工事施工業者も休みであり、3 月の電気設備法定点検の初日は全停電を伴う作業であることから、他の工事を行うことは難しく、フリーハンドで施工できるのは年間わずか一日しかない状態であった。

原則、客動線に関係する箇所は極力夜間工事で対処するようにしているが、夜間は施工性が悪く、割増工

賃と当館施工管理職員の配備に係る経費の問題が生じる。本来、開館中の施工は来館者への危険性が高まること、雰囲気低下等を招くことから行うべきではないが、一夜の施工時間には限りがあることやモルタル・塗装等の養生の必要性もあり、開館中の施工もやむを得ない状態であった。その際は、来館者への迷惑を最小限にとどめるため、過去の来館者数データを基に閑散期の平日等に実施してきたが、資材搬入、足場確保、施工中の音・振動など、開館中の施工には縛りが強く、大規模な工事が行えないことから、今後、加速度的に進む老朽化対策のため、集中補修工事のための休館日は、来年度以降も必要であると考えている。

一方で、閑散期の平日とはいえ、3月の上旬でも一日当たり300人の入館者が見込めることから、必要最小限の臨時休館日数にすることは必要である。平成22年度は、工事内容・スケジュール調整等を行うことで、前年度4日間であった臨時休館日を1日短くすることができた。

6月18日に起こしてしまった日本海大水槽展示魚類等の大量死亡事故により、マリニピア日本海のメイン水槽である日本海大水槽が復旧するまでの間、水族館として不完全な状態で開館することとなったため、入館料を全額免除として開館した。

市民の貴重な財産を失ってしまったこと、新潟市水族館というブランド及び信頼に傷をつけてしまったことで、市民の皆さまに多大なご迷惑をおかけしたことを深く反省している。

事故当日は本館を閉鎖して営業を継続。事故の翌日はパーテーションで仕切ることで日本海大水槽の観覧を制限して営業を継続したが、アクアマリンふくしまから約1,800点の魚等を寄贈いただいたことから（昼過ぎに搬入）、午後3時に日本海大水槽の観覧を再開することができた。

他館からの協力を得て、6月22日には展示種数、展示個体数ともに事故発生前と遜色のない状態に回復したが、入館者への無料期間終了の周知期間を考慮し、6月24日まで無料入館とした。

無料入館期間中、非常に多くの市民からご来館いただき、マリニピア日本海へのニーズの高さを再認識することができた。無料入館を実施したことによる入館料収入の損失等、市ならびに市民の皆さまに非常に多くの負担を負わせてしまったことを深く胸に刻み、多くの方から愛されているマリニピア日本海を安心・安全に施設管理していきたい。

3月11日の「東日本大震災」発生時、東北電力高圧受電系統の周波数低下が起こったことで自家発電機との系統連係が切れ東北電力からの買電の送電がストップ、全館が停電したことから、復電までの約15分間入館を停止した。

入館者を安全な場所に誘導する一方、余震の恐れがあったことから、水槽・ガラス等に近づかないよう、落下物に注意するよう喚起した。揺れにより、水槽の水（海水）が溢れだした個所がいくつかあったが、入館者の安全確保について素早く適切な対応をとることができたと考えている。

「東日本大震災」に伴う電力不足を受け、東北電力が計画停電を実施することとなったため、当館が計画停電対象エリアとなった3月17日に、計画停電の実施時間（午後5時～午後8時）に対応するため、閉館時間を30分前倒しした。

計画停電が実施された場合、コ・ジェネでの発電では非常用負荷分しかまかなえないことから、観覧通路の照明、展示水槽用の照明等が消えてしまう。そのため、来館者サービスを提供することができず、開館することは難しい。今回は供給力が需要予想を上回る見通しがたったため、計画停電は回避できたが、計画停電の中止の発表が計画停電開始予定時間の2時間前であり、既に閉館時間の前倒しを告知していたこと、節電への協力の意味も含め、閉館時間は予定通り30分前倒しとした。

3月28日以降、東北電力が次の一週間分の計画を前の週の金曜日に発表してくれるようになったことから、対応はとりやすくなった。今後計画停電の実施予定時間が午後の場合（午後5時～午後8時）閉館時間の前倒しをすることなく運営することは可能だと考えている。

しかしながら、実施予定と発表された場合の最終決定は計画停電開始予定時間の2時間前となることから、計画停電の実施予定時間が午前の場合（午前9時～正午）テナントの仕入れの問題、職員（テナント職員

も含む)の出勤時間の問題等もあることから、開館時間の繰り下げを行わざるを得ないと考えている。飼育している生物の生命維持のために必要な設備については、本館分は非常用の回路に組み込まれているためコ・ジェネでの発電で対応ができるが、別館分については非常用の回路に組み込まれていない状態である。今回の計画停電は、寒い時期で3時間という限られた時間であったことから、ラッコ水槽の水温維持等の問題は生じなかったが、今後、電力需要がピークを迎える夏場に計画停電が実施される可能性が高いことから、別館の飼育生物の生命維持について早急に検討していく必要があると考えている。また、リニューアル後の非常用負荷の持ち方について考える良い機会でもあることから、リニューアル実施設計に向けて、実際の飼育現場に即した非常用負荷の持ち方等について市に提案を行っていききたい。

(2) 展示生物の状況について

[総括]

協定書の仕様書に謳われている約450種、20,000点の魚類、海獣その他水生生物の飼育展示規模を維持するとともに、展示内容の魅力の向上に努めた。

6月に起こしてしまった日本海大水槽展示魚類等大量死亡事故で、7,000点もの魚類等を死亡させてしまい、市民の貴重な財産を失ってしまったことを深く反省している。

友好提携館である「アクアマリンふくしま」や普段から親交の深い「のとじま臨海公園水族館」等、多くの園館から協力いただくことができ、一週間で正常展示を復旧することができたが、市民の皆さんやマリニピア日本海のファンの皆さんを心配させ、多大なご迷惑をおかけしてしまったことを申し訳なく思っている。今後、より一層の飼育技術の向上、情報の共有化に努め、安心・安全な運営を心掛けていきたい。近親繁殖防止の目的でのとじま臨海公園水族館に貸していたゴマファザラシのメスが平成22年3月28日に出産し、その第一子(メス)を10月27日にマリニピアに返還してもらった。

平成23年3月29日にはマリニピアで飼育中のゴマファザラシが出産した。出産経験のない若い個体であったためか、出産後母獣が仔獣の世話を全くしなかったため、職員の手で人工飼育を行った。しかし人工飼育のかいなく、4月1日に腸捻転のため死亡してしまった。人工飼育の難しさを痛感したが、ここで蓄積したノウハウを次回に活かしていきたいと考えている。

飼育下で繁殖した生物を積極的に展示した。ホトケドジョウやタツノオトシゴの仔魚・稚魚をエントランスホール特設水槽に、イバラトミヨとシナイモツゴを信濃川水槽に、イトヨをマリニピアホール特設水槽に展示した。これらの仔魚・稚魚の育成技術を確認し、成長過程を効果的に展示するとともに、希少淡水魚の域外保全()への取り組みも紹介することができ、非常に有意義であったと考えている。

パスポート利用者を意識し、季節感のある展示更新を心掛けた。サケ、シロウオ、アカムツ(通称=ノドグロ)、カワヤツメ、アキアミ(通称=アカヒゲ)等、季節だけではなく、地域を特徴づける生物を積極的に導入した。

毎月実施しているアンケート調査でも「書いてある説明が分かりやすくてよい」「沖縄美ら海水族館や名古屋港水族館にも行っているが、マリニピア日本海は非常にレベルが高いと思った」「いろいろなコーナーがあり、来るたびに楽しんでいる」「めずらしい魚がいてただただビックリ」「子どもが新しい魚がたくさんいて楽しかったと喜んでいて」「ガラ・ルファ(ドクターフィッシュ)の体験コーナーがすごく楽しめた」等の声が寄せられている。

今後とも、開館以来の管理運営により蓄積してきた豊富な知見に基づき、創意工夫を重ね、展示生物の充実や、入館者に対する正確かつタイムリーな情報提供に努めていきたい。

また、常に新鮮味のある展示を心掛け、リピーターにも十分満足してもらえるような魅力あふれる展示を行っていききたい。

「域外保全」とは本来の生息地以外(例えば水族館や動物園)での保全のこと。本来の生息地での保全(例えば自然保護区など)は「域内保全」という。

(3) 通年事業の実施状況について

[総括]

バックヤードツアー

通常は公開していない水族館のバックヤードを職員の引率で見学してもらい、水質管理の仕組みや餌の解説等を通じて、水生生物やその生息環境についての関心を高めてもらうことを目的に実施している。平日は1日2回、土・日曜日は1日3回実施し、各回の定員を10名としているが、担当者が2名出勤している日は定員を倍増して実施している。

動線の安全確保に十分に配慮し、平成22年度も無事故で実施することができた。

参加者からは「日本海大水槽を上から見られたのが印象的だった」「説明が分かりやすかった」等の感想が寄せられている。

ペンギンガイドツアー

通常は公開していないバックヤードで、パネル・巣箱・羽毛・卵の標本やレプリカを用いて、分類や生態、生息地の環境、フンボルトペンギンが絶滅に瀕している背景、水族館における域外保全活動・繁殖の実施等の解説を行い、ペンギン類とその生息環境への理解を深めてもらうことを目的に実施している。毎月実施しているアンケート調査で「分かりやすかった」「ペンギン島の裏側とか、ペンギンの人間関係(?)の話とかがおもしろかった」等の声が寄せられている。

イルカショー・トドの給餌タイム・ラッコの給餌タイム

「イルカショー」「トドの給餌タイム」「ラッコの給餌タイム」は、「水生哺乳類の健康管理には、長期間にわたるトレーニングの成果によることが多い」こと等、生物学的解説に重きを置いて実施している。これらの事業によって、生物の生態や保存、海洋環境の保全への関心を高めてもらうことができたと考えている。

「イルカショー」では、冬期間の悪天候時には暖房設備の整った屋内プールでの実施、多客期には実施回数を増やす等、より多くの来館者が快適にショーを楽しんでもらえるよう配慮している。

毎月実施しているアンケート調査で「イルカショーの解説が分かりやすく、実際にイルカを示しながらの説明でとてもよかった」「イルカがあんなに細かい指示で、フラフープ、フリスビー、ボールを扱えると思っていなかったし、ジャンプも水しぶきが少なく華麗で感動した」「イルカショーの最後に質問させてもらえてよかった」「屋内でのイルカショーを見たが、ジャンプに迫力があつた」「前に見たときよりも、トレーニングされているように感じた」「イルカショーのレベルはマリニピア日本海が一番高いと思う」「ラッコの給餌タイムの説明が分かりやすく、おもしろかった」「ラッコの毛を触ることができたのが印象的だった」「丁寧な説明で分かりやすかった」「トドの給餌タイムの解説は雰囲気があつてとてもよかった」「トドの大きさに子どもたちが大喜びしていた」「トドの給餌は別の水族館で見たことがないので、次回は早めに行つて前の方で見たいと思う」等の声が寄せられている。

今後もこれらの事業を通して、解説パネル等では説明しきれない行動や生態・形態を、正確に具体的に分かりやすく解説していきたいと考えている。

タッチ水槽ガイド

裏返したヒトデの起き上がり行動を観察しながら解説する等、生き物のちょっとした不思議を体感してもらおうと、タッチ水槽脇で簡単な実験を見せながら生き物の生態を紹介している。

毎月実施しているアンケート調査で「タッチ水槽で説明があつてよかった」等の声が寄せられているほか、「タッチ水槽が楽しかった」という声が従来よりも多数寄せられており、簡単な解説や実験といった動機付けが、生き物へ興味を広げるきっかけづくりとして有益であると実感している。

スポットガイド

平成 22 年 11 月 20 日から、コウイカのスポットガイドを新たにスタートした。

1 日 1 回、平日は概ねタッチ水槽ガイドの直前となる午後 1 時 15 分から、土・日・祝日は来館者の動向を見ながら昼頃に実施した。毎回開始する際に、イカに餌を与えることを周辺の来館者に呼びかけ、水槽前に集まった人（各回 5～10 人程度）を対象に、約 5～10 分の解説を行った。

コウイカに与えている餌、コウイカの腕の本数、餌の捕り方（捕食）と使用する腕（触腕）餌の食べ方（カラストンビと歯舌について）、コウイカの甲、イカの寿命などについて、コウイカの捕食シーンを観察してもらいながら説明した。平成 23 年 1 月 5 日からは、水槽内に産卵が観察されるようになったため、卵の紹介、産卵の仕方等も解説に取り入れた。

参加者のほとんどが、イカの捕食シーンを見るのは初めての体験であったようで、非常に興味深く観察してくれていた。開始の際に「解説をします」ではなく、「イカに餌を与えます」とだけ声掛けを行い、誰でも気軽に立ち寄れるように配慮したことで、コウイカに全然興味がなかった人にも、観察してもらう機会、解説を聞いてもらう機会を提供することができたと考えている。

参加者に確認したところ、「コウイカの腕の本数」の認知度は 1/3 程度であり、「歯舌ですりおろして食すこと」「寿命が 1 年であること」はほとんど認知されていなかった。

コウイカは、「寿命が 1 年であること」「解説可能な観察のしやすい体のサイズは秋から冬の期間に限られてしまうこと」「体のサイズが小さいうちは、餌がいつもある状態での飼育が不可欠であること」から、捕食シーンを見せることのできる期間に限られてしまう。また、コウイカは成体の採集が困難であるため、卵からの育成が必要であり、展示が可能となるサイズまで育成するのに、海岸で頻繁に餌料の採集を行わなければならない等、準備が大変である。そのためコウイカを観察できる施設は全国的に少ないのが現状である。

苦労も多く、期間も限定的ではあるが、コウイカはスポットガイドを実施するのに最適な生物であると考えている。生物解説を目的としたスポットガイドは、教育的効果が高いことから、今後もいろいろと工夫を重ね、継続して実施していきたい。

（４）イベント等の実施状況について

[総括]

春期特別展「新潟県の希少淡水魚保護の現状」

マリニピア日本海では、開館以来、県内各地で行ってきた生息調査活動を通して、地元の保護団体と交流を深めている。

水族館と保護団体、保護団体同士の連携は、保護活動を展開する上で極めて重要となっていることを踏まえ、県内に生息する代表的な希少淡水魚であるシナイモツゴ、イバラトミヨ、ホトケドジョウの保護活動に取り組む 4 つの地元団体について、パネル等を用いて紹介した。併せて、当館で繁殖に成功した希少淡水魚 4 種（シナイモツゴ、イバラトミヨ、ホトケドジョウ、メダカ）も展示した。

地域に生息する希少淡水魚を保護しようとする運動において、「保護対象を希少淡水魚そのものに限定するのではなく、その周りを取りまく環境にも注目して、地域の住民（特に子ども）と共に生物多様性の大切さについて考えていく」といった取り組みを紹介することができた。

希少淡水魚を取り巻く問題や今後の展望について考えてもらうよい機会となったと考えている。

20 周年記念夏期特別展「対馬暖流の贈り物」

生物の多様性に富む熱帯・温帯の生物を新潟の地まで運び込む等、日本海の生態系に大きな影響を及ぼしている「対馬暖流」をテーマに、日本海側に立地する水族館として 20 年間地道に取り組んできた「漂着生物調査」で得られた標本や資料を活用して、20 周年の節目の特別展を企画・実施した。

対馬暖流の軌跡や新潟県沿岸での漂着および捕獲記録を中心とした内容で構成し、生体展示は、熱帯の海から流れてくる海流の軌跡に注目し、熱帯域の生物から新潟に至るまでの生物を地域ごとに紹介した。標本展示は、新潟県に漂着した鯨類や貝類等の骨格標本を展示し、深海性の希少な生物、熱帯性の大型生物、当館での座礁生物の保護活動等を、写真や映像等で紹介した。

当館で調査した漂着生物の記録 52 種 179 個体については、大型スクリーンを用いて紹介し、また、日本海側での漂着最北記録となるダイオウイカの液浸標本や、日本海側での漂着記録 4 例目となるマンザイウオの液浸標本等は実物を展示することで、普段見ることができない生物を実際のスケールで紹介することができた。

生体展示では、対馬暖流域に立地している水族館に協力を仰ぎ、かごしま水族館、しまね海洋館、のどしま臨海公園水族館から協力を得ることができた。これらの協力は、20 年間培ってきた友好関係や技術協力等の積み重ねが実った結果だと考えている。各館からの協力を得られたことにより、国内でも少数館しか展示例のないホソトビウオやアカオビハナダイ等の希少種を展示することができ、生物多様性を理解するのに非常に効果的な展示内容になったと考えている。

対馬暖流と生物の回遊・分散といった生きるための戦略、生物の回遊と漁業との関わりといった人間生活と海について理解を深めてもらう良い機会となった。また、ウミガメ類や鯨類が漂着した場合は、死因解明のために剖検を行い、海洋生物の生態研究の資料として有効活用するために、研究機関等へ情報提供を行っていること等も併せて紹介することで、漂着生物調査を通じて、環境問題、研究、自然保護活動を積極的に行う場としての水族館の役割を理解してもらうことができた。

毎月実施しているアンケート調査で「ダイオウイカがすごくよかった。大きいものの展示はインパクトがあっていい」等の声が寄せられている。

サマースクール（付帯事業）

a. ふれあい探検

飼育生物に実際に触れ、給餌体験をすることで、楽しみながら水生生物の知識を習得できるプログラムになったと考えている。

探検の名が示すとおり、参加した子どもたちの自主性を引き出し、積極的に行動してもらうことがこのプログラムの特徴であり、平成 22 年度はこの点を特に意識して内容を構成した。そのため、前年度実施した実験と講義のコーナーを割愛し、タッチ体験や給餌体験のコーナーに多くの時間を割いた。

タッチ体験の生物は常設のタッチ水槽生物との差別化を図るために、長期飼育が難しいアメフラシやウミウシ等を採集して用いた。ナマコやヒトデ、ウニ等の棘皮動物が中心となる常設のタッチ水槽生物には慣れている子どもでも、見慣れない軟体動物には強い好奇心を示した。それらの生物が新潟市近郊の海岸から採集されたことを知ることで、身近な自然環境に興味を持つきっかけづくりにもなったと考えている。

また、毎年少なからずアンケート用紙に「クラゲに餌をあげたかった」という記述がみられることから、初めての試みとして「クラゲの給餌コーナー」を設けた。ミズクラゲの育成は 1 年を通して行っているが、給餌体験に適当な大きさのミズクラゲを用意するには発生のタイミングを調整しなければならず、手間のかかる作業であった。しかし、ほとんどの参加者がとても興味を持って観察していたようで、この試みは大変有意義であった。

以前から、「ふれあい探検」の課題として、通年無料で行われているバックヤードツアーとの差別化という問題が挙がっていた。その問題については、ふれあい探検のメニューとして、バックヤードツアーではコースに含まれていないマリンサファリでの「アシカの給餌体験」や別館での「ラッコ水槽寒さ体験」等のプログラムを実施していることに加え、平成 22 年度には本館エリアでの

積極的体験プログラムのボリュームを増やしたことで、これまで以上に参加者の満足度を高めることができたうえ、無料プログラムとの明確な差別化ができたと考えている。

アンケート調査で「大人は知っていることでも、意外と子どもは知らないことが多いようで、実際に自ら体験することで非常に多くのことが学べたようだ」「2年前にも参加したことがあるが、以前より体験型のプログラムが多くてよかった」「バックヤードを見学することで、生まれたての魚やイカが大切に育てられていることを間近で見ることができて感動した」「それぞれの生物に合った環境や餌等、細かいところまで配慮されていることが分かった」「いろいろな設備で水槽を維持管理していることに驚いた」「丁寧な説明や手洗いの時にタオル用意など配慮してもらえてありがたかった」「親にとってもよい自由研究となった」「来年はぜひ友達を誘って参加したい」等の声が寄せられている。

b. ドルフィンスクール

イルカに関する正確な知識の向上を目的として、講義、観察、体験学習を組み込んだプログラムを実施した。

講義の中にゲーム性を取り入れた「イルカパズル」を導入することにより、楽しみながら学んでもらうことができるように配慮した。イルカの体を4つのブロックに分け、各部位で異なるパズルを用意し、制限時間内に完成させるというものである。参加者自身が実際にイメージの変化を実感できるように、体の名称記入を「見る前」「見た後」の2度にわたる記入方式も導入した。知識を習得するのに有効な手段と考えている。

アンケート結果を見ると、参加者の満足度は高く（満足96%）、「イルカの背びれ、胸びれは思った以上に頑丈だった」「歯が鋭い」「健康管理にチェック項目がたくさんある」「人と同じで体温で体の調子分かる」「トレーナーの努力でイルカの健康が保たれている」「様々な訓練をしてショーに出している」「飼育下で生きていくためにはトレーニングが必要」「スタッフの説明が分かりやすかった」「スライドと講義があって理解しやすかった」といった意見が寄せられた。これからも事業を継続することで、正しい情報を発信していきたいと考えている。

c. イルカトレーナー体験

鯨類を飼育する上で必要不可欠な生物学、飼育環境、トレーニング理論等についての理解を深め、正確な知識の向上及び正しい情報の発信を図ることを目的として実施した。

講義では「トレーニング理論」を理解してもらうために、行動形成（シェイピングゲーム）を導入し、楽しみながら学ぶプログラムを展開した。

飼育設備の見学、専門的な講義を行うことにより、飼育動物の生命維持に必要な設備、トレーニングを学んでもらい、海洋環境の保全に対する関心を高めてもらうことができたと考えている。

アンケートの結果を見ると、参加者全員が満足と回答しており「イルカの体のことだけではなく、トレーニング理論も学ぶことができてよかった」「反応と刺激の考え方やほめ方のコツ等、トレーナーのものの考え方が学べた」「普段見ることのない『仕事』としての水族館を見ることができてよかった」「ボディーチェックでイルカがしっかりと管理されていることに驚いた」「自分なりにイルカのことを勉強しようと思った」「今後もこの事業を継続して行ってほしい」といった声が寄せられている。

d. ナイトツアー

飼育生物の夜間の様子を観察してもらうことで、昼間の開館時間内では知ることのできない新たな発見や、違った視点からの観察方法を提案することができたと考えている。

照度変化に伴う体色の变化、体内時計の作用、夜行性動物の行動観察、発行生物の実験等、ナイトツアーならではのコンテンツをできるだけ盛り込み、日中のプログラムとの差別化を図ることにより、他のプログラムへの参加経験者にも満足してもらえる内容となるよう努めた。

屋外が完全に暗くなってから観察したほうが昼間との違いが分かりやすいため、前年度までは7月にも実施していたが、平成22年度は全ての日程を8月に移行した。その結果、日没から時間を置いてツアーを開始することができ、トドやアザラン等が完全に眠っている状態を観察することができた。

また、これまでペンギン島もツアーのコースに入れていたが、昼夜の差が少ないペンギンについては平成22年度からナイトツアーの観察対象から外した。その結果、時間的に余裕が生まれた分、最も伝えたいポイントに焦点を絞り観察と解説を行うことができたと考えている。

プログラムの設定時間上、猛暑の中、日中仕事等の活動をした人の参加が多くなり、やや疲れ気味の参加者も見受けられ、自由時間にソファに座って休んでいる人もいた。職員を囲み参加者が座ってレクチャーを受けられるような場面をもう少し取り入れれば、より参加者に優しいサービスになったのではないかと思うので、来年度の改善点としたい。

参加費が大人2,000円、小人1,000円と、当館のイベントの中では高額な部類に入る企画であるにもかかわらず、応募総数が示すとおりナイトツアーの人気は依然高い。夏の定番企画の1つとして今後も続くと思われる本プログラムをリピーターにも飽きられることのないよう、毎年工夫し、水族館の魅力アップに役立てていきたい。

アンケート調査では「昼と夜では活動の様子が違ったり、模様が変化したりと、生きていくうえで様々な知恵を凝らして生活を営んでいることが分かった」「映像や知識ではない実体験ができてよかった。この体験をきっかけに子どもからもっと生物に興味を持ってもらいたい」「寝ている姿しか見たことのなかったビーバーが、実に活動的で驚いた」「疑問に感じたことをその場で気軽に質問できてよかった」「詳しい解説付きで120%楽しめた」「スタッフの苦労話や工夫等を聞いて、以前より水族館に親しみを感じた」といった声が寄せられている。

冬期特別展「クマノミのふしぎ」

開館以来初の試みとして、クリスマス・冬休み期間に合わせて冬期特別展を開催した。

海洋生物の中で知名度の高いクマノミ類は、実は不思議な生態や形態を持っている他に類を見ない魚類であることに着目し、人気のクマノミ類を通して、海洋生物に興味を持ってもらうきっかけづくりとなればと企画した。日本近海に生息する6種全てと外国産5種のクマノミ類を展示した。

分類や性転換といった生物学的な内容を紹介する一方、ディズニーアニメ映画で有名になったクラウンアネモネフィッシュ、一緒に映画に登場したスズメダイ科やニザダイ科魚類を集めた水槽も展示するなど、高度な内容から娯楽色の強い内容までを用意し、誰もが楽しみながら興味深く学んでもらえるように心掛けた。また、飼育下で繁殖したハマクマノミ、カクレクマノミ、セジロクマノミ、トウアカクマノミの4種を展示した。当館での繁殖活動についての紹介や、育成の際に記録された卵や仔魚・稚魚の形態変化や発生の様子をパネルにして分かりやすく展示する一方、技術的に困難な仔魚・稚魚の生体展示を行い、成長過程を効果的に展示することができた。これまで培ってきた飼育および展示技術の賜物だと考えている。

毎月実施しているアンケート調査で「赤ちゃんのクマノミが展示されていて子どもがとても喜んだ」「きれいで大人もとても楽しめた」等の感想が寄せられた。また、インターネットのニュースでも取り上げられるなど、多方面から興味を持ってもらえた企画であったと考えている。

入館者数が激減する冬に人気の高いクマノミ類の特別展を実施することにより、外出を控えがちな時期でも来館動機を促す効果が期待できたと感じている。今回の試みは、今後も季節展を実施する良いき

かけになったと考えている。

第13回児童絵画展（付帯事業）

描くことを通して、水生生物への関心を高めてもらうよい機会になったと考えている。また、入選作品の館内展示や、出展者全員への家族割引券配布が、閑散期の来館促進に貢献していると考えている。さらに、学校経由で作品を募集していることにより、学校遠足での利用促進の動機付けともなっている。平成21年度では1,493点だった応募作品は1,611点と118点増加しており、より多くの児童から水生生物に興味をもってもらうことができたと考えている。平成21年度と同様に、冬休み期間を中心に作品を展示したことから、出展者も来館しやすかったようで、入選者や出展者へ配布した招待券や割引券での入館者数は平成21年度より19人多い491人であった。

今後、対象を児童以外とした取り組みや、寄せられた作品の活用等について検討していきたいと考えている。

春期特別展「新潟市レッドデータブックの水生生物」

新潟市域に生息・生育する陸産・淡水産の動植物を対象生物とした「大切にしたい野生生物～新潟市レッドデータブック～」を、新潟市が平成22年3月に刊行した。同ブックの作成目的のひとつとして、市民に生物の保護について広く啓発することを掲げているが、紙版は発行部数が少なく、非売品である。電子版は新潟市のホームページから自由にダウンロードできるようになってはいるが、その有効活用のためには市民への積極的な周知が必要と考え、この特別展を企画した。

掲載種の中から特に上位ランク（絶滅、野生絶滅、絶滅危惧 類、絶滅危惧 類）のイトヨ等9種の水生生物を展示し、新潟市レッドデータブックの紹介と、掲載種の生息状況や保護の現状等についての解説を行った。

展示生物は両生類3種、魚類4種、貝類3種、昆虫類1種、水生植物5種である。種ごとに新潟市レッドデータブックの評価ランクに加え、環境省、新潟県での評価ランクも表示することで、全国的な状況と対比しながら、新潟市の希少水生生物の生息状況を理解してもらうことができたと考えている。水生植物は、開催時点では越冬状態の殖芽（栄養分を貯蔵した芽）であったが、開催直後から伸長を開始し、日々変化する様子を観察できたので、パスポート来館者等に楽しんでもらえたと考えている。

いきもの教室（付帯事業）

毎月1回、全12回のプログラムを計画したが、東日本大震災の影響で3月の回を中止したため11回の実施となった。

12回は全て違うプログラムとし、対象年齢を原則小学生以上（内2回のみ4歳以上）に設定した。これは、昨年度試行した「小学4年生以上対象」「中学生以上対象」のプログラムへの応募者数が少なかったことを受けたもので、今年度は小学校低学年の児童とその親を主な対象としたプログラム作成を心がけた。その結果、若干テーマがマイナーと思われる「アマガエルの体を見よう」のみ定員割れしたが、平均で2.5倍の応募があり、昨年度の1.7倍を上回ることができた。

アンケート結果を見ると、参加者の満足度は非常に高く、96%の方が「とてもおもしろかった」「おもしろかった」と回答している。また、理解度を問う設問では「よく分かった」が90%以上（100%の回も多数）であり、対象の設定とプログラム内容はマッチしていたと考えられる。具体的な感想についても、「図や写真、映像を使っただけの説明が分かりやすかった」「実物に触ったり観察したりしながら学べる点よかった」「顕微鏡を使うなど普段家では体験できないことできた」「知っていると思っていた生きものの事も意外と知らない事が多いことがわかった」「標本（クラゲ）を持って帰れるので思い出になる」といった肯定的なものが多かった。

また、いきもの教室の終了後に行う担当職員とボランティアとのミーティングでは、「継続すべき良かった点(keep)」、「問題点(problem)」、「次にやってみたいこと(try)」の3つに分けて考えるKPT法(プロジェクトマネジメントでよく行われる方法)を用いてふりかえりを行っている。このミーティングの内容を活かすことで、いわゆるPDCAサイクルを回しながら実施できたと考えている。水の生きものについての専門的な事柄を一般の方々に分かりやすく紹介するという、水族館の重要な役割を具現化するプログラムとして、この「生きもの教室」は今後も新たな工夫を折り込みながら継続していく事が重要である。

大人のための水族館講座(付帯事業)

これまでほとんど実施してこなかった「大人向け」プログラムを行うことで、「多様な学習機会を提供する場」としてのマリンピア日本海の活動の幅を広げるとともに、水族館活動への理解者を増やすことを目的に実施した。

「水族館について楽しく真面目に考える」をテーマに、もう1歩深く水族館を知りたいと思っている大人の水族館ファンを対象にした講座とした。連続性のある3回プログラムとし、3回連続参加の希望者を優先した。また、各回共、講義形式とワークショップ(または見学)形式を取り入れ、参加者が自主的に学べるような雰囲気を持った講座をデザインするようにした。

1回目は館長による講義とそれを元にした小グループによる話し合いを行った。アンケートでの参加者の満足度は、「満足した=14名」「満足しなかった=2名」「どちらともいえない=8名」であった。「満足した」の数が少ないようにも感じるが、大人の場合はそれぞれが「目的意識」や「プログラム内容についての期待」を明確に持っているため、実際のプログラム内容とのギャップが大きかった場合には「満足した」とは言いづらいという意識が働いたようである。「満足した」を選択しなかった参加者も、館長の話そのものには「楽しかった」「新しいことを知ることができた」というような肯定的な感想を書いている方が多かった。

2回目は「展示とバックヤードの見学・解説」という表題としたが、バックヤードをじっくり見学してもらうため、展示側からの見学は行わなかった。そのため、マリンサファリを除くすべての施設のバックヤードを解説付きで見学することができた。参加者の満足度は非常に高く、アンケートでは全員が「満足した」を選択した。「水族館ファン」として、実際の飼育の現場をじっくり解説付きで見学できたことは、非常に有意義な時間だったと思ったようである。

3回目は東日本大震災の影響による電力不足対応のため中止した。3回連続で完結するようなプログラムを考えていたので、最後を実施できず、非常に残念であった。

平成23年度はより充実したプログラム構成で行いたいと考えている。

(5) 20周年記念イベントの実施状況について

[総括]

開館記念プレゼント

開館記念日の7月27日をはさんだ3日間、各日先着300組の入館者に開館20周年のロゴが入った20周年記念オリジナルブックカバーをプレゼントした。

20周年という大きな節目であることから、よく配布されるようなステッカーやシールといったものは無く、実用的で長く使ってもらえるプレゼントとして20周年のロゴを入れた帆布製のブックカバーを特別に製作した。

イルカと記念撮影

イルカ屋内プールのアクリルガラス前にイルカを誘導し、申込者からその脇に座ってもらって記念撮影

を行った。デジタルカメラで撮影を行い、退館する際にプリントアウトした写真をプレゼントした。人気度は非常に高く、開館時間の午前 9 時から受け付けを行ったところ、すぐに定員に達した。しかしながら、事業の実施時間（撮影時間）が午後 1 時であったため、受け付けから撮影まで最大 4 時間を館内で過ごさなければならず、待ちきれずに 2 組がキャンセルしてしまった。今後同様の事業を実施する際は、参加者の滞在時間（おおむね 2 時間）を考慮して、受付開始時間を設定する必要性を感じた。

開館 20 周年セレモニー

開館記念日の 7 月 27 日の 11 時から約 10 分間、イルカショープールで開館記念セレモニーを行った。セレモニーは、市長の挨拶の後、市長と入館者代表（当日 20 歳の誕生日の市民）が開館当初から活躍している 2 頭のイルカと握手する、という 2 部構成とした。また、イルカとの握手の見本を開館当初にイルカトレーナー（第 3 係長）だった館長が行うことで、職員と飼育生物との緊密な関係を印象づける演出とした。

入館者代表については、7 月 27 日が誕生日の入館者（年齢は不問）に当日お願いするということで計画した。結果的に当日 20 歳の誕生日の入館者をお願いすることができたのでセレモニーとして非常に良いものとなった。また、定時のイルカショーに先だって行ったため、スタンドはほぼ満員で、拍手や歓声も大きく祝賀的な雰囲気で行うことができた。

なお、このセレモニーについては事前に報道各社に連絡していたため、各テレビ局および新聞社が取材に来館し、当日（新聞は翌日）報道された。

20 歳の誕生日記念プレゼント

開館記念日の 7 月 27 日に 20 歳になった入館者（平成 2 年 7 月 27 日生まれ）にマリンピア日本海オリジナルグッズ詰め合わせ（エコバッグ、手ぬぐい、風呂敷）を誕生日記念としてプレゼントした。誕生日の確認は受付で免許証などの身分証明書を見せていただく事で行った。結果は 1 人で、その方に開館 20 周年セレモニーの代表者になっていただいた。

7 月 27 日誕生日記念プレゼント

開館記念日の 7 月 27 日が誕生日の入館者にマリンピア日本海オリジナルポスターとオリジナルエコバッグをプレゼントした。誕生日の確認は受付で免許証などの身分証明書を見せていただく事で行った。最終的に 15 名の方にプレゼントすることができた。

日本海大水槽給餌タイム

イワシ等、群れで行動する魚類の魅力をより多く引き出すことを目的に、通常は大水槽の水面から与えている餌を、コマセ籠を用いて水中で餌を与えた。それによって、イワシ等の群れのダイナミックな動きを見てもらうことができた。

開始と同時に歓声が上がリ、来館者は熱心に魚類が餌を食べている様子を観察していた。

限られた時間ではあるが、大水槽の魚類をより効果的に展示することができたと感じている。

大水槽正面やマリントンネルの混雑が懸念されたが、最前列の観覧者が自然と入れ替わるなど、特に問題はなかった。

魚類が餌を食べる行動は、時間経過とともに勢いが緩慢になるので、10 分間という実施時間は適当であったと考えている。

マリンサファリ給餌体験

イベント用の新たな出し物として、初めて行った試験的な企画であったが、安全にスムーズに実施でき、参加者の満足度は高かったようである。

体重約1トンの雄のトド(愛称タケ)を間近で見るといふ企画自体がこれまでなかったが、今回の企画ではさらに、柵越しではあるが直接手渡しで餌を与えることができ、参加者のインパクトは想像以上であったと思われる。タケのあまりの大きさを目の前にして、怖気づいてしまう子どももいたが、家族の応援で恐怖を克服し、給餌をやり遂げるという達成感を味わってもらうことができた。

タケに間近で会いたくて、開館直後の午前9時5分に来館したが、既に定員に達していたため、翌日、開館前から並んで参加した親子もいたように、タケの隠れファンは多いようである。「マリンピア日本海の顔」の1つとして、最大飼育動物であるタケの活用は効果が大きいと感じている。

平成22年の夏は、全国で記録的な猛暑となり、熱中症による死者数が過去最大となった。この企画の実施場所は、実施時間の午後1時には日陰になる場所であったため、屋外イベントとしては暑さの問題が比較的少なく、参加者・飼育生物ともに負担は軽かったと思われる。

「アシカと記念撮影」等、マリンサファリで行える他の企画と比べて、生物への負担が低い割に、参加者の満足度が高い本企画は、生物の健康管理の点においても好ましいことから、今後、記念行事等の出し物として、使いやすい企画であると考えている。

しかしながら、本来夏が繁殖期である雄のタケをコントロール可能な状態にしておくためには、春から給餌制限をかけ、摂餌統制下におく必要があることから、計画的な実施が必要である。

当選者73人の内5人のキャンセルが発生した。これは、募集が開館時間からの先着順であったため、応募から実施まで4時間も待たねばならず、この待ち時間の長さがひとつの要因となったと考えている。募集方法の工夫による待ち時間の短縮、もしくは実施時間の前倒しができれば、より良いサービスになったと思う。

アシカと記念撮影

イベント用の新たな出し物として、初めて試みた企画である。

カリフォルニアアシカの隣に参加者が立つという、これまでに実施したことがない形式であったため、企画当初、アシカによる危害が生じるのではないかと懸念されたが、アシカと参加者を隔離する専用の台を作製し、何度もリハーサルを繰り返して安全確認を行った結果、危険な状態に陥ることなく、安全に事業を実施することができた。

普段はガラス越しに離れた場所からしか見ることのできないアシカに近づけること、並んで記念撮影ができる上、撮影した写真をプレゼントしてもらえる企画であったことから、参加者の満足度は非常に高かったようである。

観覧通路に飼育生物が現れるため、当選者以外の一般入館者の注目度も高く、すぐに人だかりができた。20周年記念イベントとして、非日常的・お祭りのような雰囲気醸成するには効果的な企画であったと考えている。しかしながら、記録的な猛暑の中、午後1時という炎天下の中で行った今回の形式では、参加者及び飼育生物に少なからず負担がかかってしまったと思われる。計画段階では、この夏がそこまで暑くなると想定していなかったのだが、今後も同時期に同様の企画を行う場合、猛暑も想定した実施時間・実施場所選びが必要であり、生物への負担を考えた場合は、夏以外の時期に実施すべき企画であると考えている。

水族館側で撮影するカメラとして、コンパクトデジタルカメラを使用したところ、プリント時になってピントが合っていないことが判明するというトラブルが初日に生じた。幸い、該当参加者を館内で直ぐに探し出すことができ、撮り直しを行うことができた。それ以降は、写りをその場で確認しやすいデジタル一眼レフカメラを使用することで対応した。

また、当初、プレゼントする写真の枚数を各グループ1枚としていたが、複数家族で1グループを構成している参加者もいたことから、家族数を確認した上でプリントするように変更した。

手探り状態でスタートした企画ではあったが、実施しながら改善を行っていったことで、より良いサービスを提供できたと考えている。

(6) 事故後の復興イベントの実施状況について

[総括]

わくわくドキドキ日本海大水槽

a. 日本海大水槽を上から見よう

通常はバックヤードツアーでしか公開していない日本海大水槽のバックヤードを職員の引率で見学してもらい、調餌室・冷凍庫を見てもらいながら餌の解説を行った。

なるべく多くの入館者に気軽に参加してもらえるように、通常のバックヤードの内容を簡略化して行ったうえ、担当職員2人が時間をずらして2班を担当する方法をとったため、一日約40人から参加してもらうことができた。

15分おきに4班に分かれて実施したことから、参加者が集合する際に混乱が生じるのではないかという懸念があったが、集合場所としたエントランスホールに各回の案内板を出し、こまめに声掛けをした結果、比較的スムーズに集合してもらうことができた。

一部、集合時間に間に合わなかった参加者がいたが、次回に組み入れる等、柔軟な対応に努めたことから、気持ちよく参加してもらうことができたようである。

b. 日本海大水槽へエサをやろう!

通常はバックヤードツアーでしか公開していない日本海大水槽のバックヤードを職員の引率で見学してもらい、調餌室・冷凍庫を見てもらいながら餌の解説を行った後、実際に給餌を体験してもらった。

大水槽で飼育している魚類は40種類以上で、種類に応じた餌が必要であること、餌の種類とそれを食べる魚類を考慮して餌を与える順番を工夫し、全ての飼育生物に餌が行き渡るようにしていること等を解説した。

与える餌は大小さまざまな数種類を用意して、参加者に選んでもらった。給餌体験を通して、栄養管理等について興味をもってもらうよい機会になったと考えている。

また、参加者の「荷物預かり所」を設け便宜を図ったり、給餌体験の際にはラテックス製の手袋を使ってもらう等、衛生面にも配慮した。

c. トッキッキ・まもりんがマリンピアへやってくる!

お盆の時期を除く8月中、新潟県宣伝課長の「トッキッキ(とっぴー、きっぴー)」、海や川をまもる「まもりん」など、新潟に係る生きもの系ゆるキャラとマリンピア日本海の Mascot 「ララちゃん」「ボルト君」が、館内各所で入館者を歓迎した。

全国のゆるキャラの中でもトップクラスの人気を誇る「トッキッキ」がマリンピア日本海にやって来たということで、子供達だけでなく大人もとても喜び、一緒に記念撮影を撮っていた。

なお、着ぐるみの中に入っただけの活動は専門性を必要とすることもあり、イベント会社に運営を委託した。

d. ホシエイの子どもの愛称募集

大水槽事故に関しての象徴的な生物であるホシエイにちなんだ3つのイベントの内の1つ目。

大水槽事故で死亡したホシエイが1年前に産んだホシエイの子ども(2個体)の愛称を募集した。募集は8月1日から14日の間、館内設置の専用紙とハガキで行ったところ、2,103枚(愛称総数3,998点)の応募があった。愛称数は1,907種類にものぼり、選考の結果「ホッシー」と「スター」に決定した。

e. ホシエイの子どもの命名セレモニー

大水槽事故に関しての象徴的な生物であるホシエイにちなんだ3つのイベントの内の2つ目。大水槽事故から2ヶ月経過した8月18日(水)に「ホシエイの子どもの命名セレモニー」を行った。愛称募集で決定した「ホッシー」と「スター」の名付け親からそれぞれ1名を代表者としてマリンピア日本海に招待し、命名証と記念品(エイのぬいぐるみ)をプレゼントするセレモニーを日本海大水槽前のマリンピアホールで行った。また、代表者以外の名付け親にはマリンピア日本海オリジナルキーホルダーを郵送でプレゼントした。

なお、このセレモニーについては事前に報道各社に連絡していたため、各テレビ局および新聞社が取材に来館し、当日(新聞は翌日)報道された。

f. ホシエイの子どもの放流セレモニー

大水槽事故に関しての象徴的な生物であるホシエイにちなんだ3つのイベントの内の3つ目。6月18日の大水槽事故の際に生まれ、バックヤードで飼育していたホシエイ4個体を信濃川河口水槽に展示する(放流する)セレモニーを8月18日(水)の「ホシエイの子どもの命名セレモニー」の後に行った。信濃川河口水槽に職員が入り、1個体ずつ水槽内に放流する様子をセレモニーとして公開した。

なお、このセレモニーについては事前に報道各社に連絡していたため、各テレビ局および新聞社が取材に来館し、当日(新聞は翌日)報道された。

g. 選べるプレゼント抽選会

入館者への感謝の気持ちを込めて、8月18日(水)から22日(日)に実施した。入館者全員に抽選券を配布し、1日3回の抽選会で当選した方(各回20名)に「ぬいぐるみ」「年間入館パスポート」「オリジナルグッズ詰め合わせ(エコバッグ、手ぬぐい、風呂敷)」の中から1つを選んでもらい、プレゼントした。

抽選場所のエントランスホールには抽選時間になると多数の人が集まり混乱が懸念されたが、大きな混乱もなく進める事ができた。また、プレゼントの引き換え業務をボランティアに頼んだところ、多数のメンバーが応援に駆けつけてくださり、スムーズに行うことができた。

h. 日本海大水槽飼育体験

通常はバックヤードツアーでしか公開していない日本海大水槽のバックヤードを職員の引率で見学してもらった後に、アカメバルの放流を体験してもらった。さらに調餌室・冷凍庫を見てもらいながら餌の解説を行った後、実際に給餌を体験してもらった。

放流の際には、水族館での魚類の取り扱いについて解説し、水質や水温等が急激に変化しないように配慮していること等も説明した。

調餌室では、使用している餌の種類、冷凍餌料を用いている理由や取り扱いの注意点、栄養管理等について解説した。

給餌体験では、大水槽で飼育している魚類は40種類以上で、種類に応じた餌が必要であること、餌の種類とそれを食べる魚類を考慮して餌を与える順番を工夫し、全ての飼育生物に餌が行き渡

るようにしていること等を解説した。

この飼育体験を通して、魚類飼育や栄養管理等について興味をもってもらうよい機会になったと考えている。

参加者には、記念品としてオリジナルキーホルダーをプレゼントしたほか、給餌体験の際にはラテックス製の手袋を使ってもらおう等、衛生面にも配慮した。

i . ダイバー給餌でイワシのトルネード

イワシ等、群れで行動する魚類の魅力を最大限引き出すことを目的に、通常は大水槽の水面から与える餌を、ダイバーが水中で与えた。それによって、イワシ等の群れのダイナミックな動きを見てもらうことができた。

ダイバーの動きで、群れをアクリルガラスに接近させるように誘導することができたので、コマセ籠を用いた給餌よりも高い展示効果を得ることができた。大水槽の前に広がった観覧者全員が見やすいようにと、偏りなく全面に魚類を誘導するように心掛けた。

コマセ籠を用いた給餌と同様に、大水槽正面やマリントネルの混雑が懸念されたが、最前列の観覧者が自然と入れ替わるなど、特に問題はなかった。

魚類が餌を食べる行動は、時間経過とともに勢いが緩慢になるので、10 分間という実施時間は適当であったと考えている。

j . 水の生きもの相談室

入館者の水生生物に対する疑問に答え、水生生物やその生息環境に対する関心を高めてもらうことを目的に実施した。

9 日間で親子連れを中心に 20 組の質問者があり、「熱帯魚の飼育方法」「イルカの調教方法」「クラゲはどうして刺すのか」等のさまざまな質問に対して回答や説明を行った。ひとりていくつも質問をする人や、長時間滞在する人もいる一方、会場を覗き込むだけで入室をためらう様子の人もいた。相談室の会場としたレクチャールームの扉を開放状態にはしていたが、エントランスホールの隅に出入口がある構造上、入りにくい雰囲気があったのかもしれないと反省している。

今後同様の事業を実施する場合は、ホールの一角をパーティションで簡単に仕切るだけにするなど、気軽に参加できる雰囲気づくり・工夫が必要だと考えている。

お泊り水族館

大水槽事故後の復興事業および生涯学習事業の一環として実施した。普段公開していない夜間および早朝の水族の様子を観察する機会を作ることで、水族に関するより多くの情報を得ることができると、および、以前より要望のある「お泊まり体験」を実施することで市民へのサービス向上を図ることを目的とした。実施時期は夜間の冷暖房を必要としない秋季（9月24日）とした。

周知・募集期間が約 2 週間と短く、参加費が高校生以上 3,000 円、小中学生 1,500 円と他のイベントに比べて高額であるにも関わらず、定員（20 名）の 4.5 倍の応募があり、宿泊イベントの人気の高さを確認できた。定員を増やし 22 名の参加とした。

プログラムは、サマースクールのナイトツアーを元に構成し、マリンピアホールでの就寝、早朝の観察を付加した。

アンケート結果を見ると、満足度は高く、22 名中 21 名が「満足」、1 名が「ほぼ満足」を選択した。意外だったのは、22 名中 18 名が「よく眠れた」と回答していたことである。これは事前の案内文でポンプなどの音が大きいことを周知したため耳栓を持参した参加者がいたこと、レンタル敷き布団を用意したことなどで、思いの外快適に過ごすことができたことが要因と考えられる。

具体的な感想としては、「少し不安の中、参加しましたが、プログラムがしっかりしていて、また、スタッフの指導が的確でした。参加する方は快適でした。(37歳)」「わかりやすい説明で夜のいきもののがよくわかりました。(10歳)」「イワシの群れの姿は素敵でした(竜宮城にいるような世界でした)。スペースを充分にとってあったので、よく眠れました。(48歳)」「消灯後がのんびりと魚をながめられて良かった。(18歳)」など、肯定的な感想がほとんどで、否定的な感想は無かった。改善点として「夜の自由時間がもっとあると良い」「飲食の時間があると良い」などをあげる参加者が何人かいた。

職員にとっては非常に負担の大きいイベントではあるが、要望が高く、参加者の満足度も高いことから今後も実施する方向で検討していく必要があると考える。

さかなクントークショー「きみもお魚博士になろう！」

11月6日(土)の11時からと14時30分からの2回、魚好きの子供達に人気がある「さかなクン」を招いてのトークショーを開催した(1回45分)。

当日は、雨が降ったりやんだりの不安定な天候で、トークショーの間にも降雨がある状況の中、さかなクンの機転の利いたトークとイラストで会場を沸かせ、観客は満足したと思われる。2回ともスタンドはほぼ満席となり、さかなクントークショーを目的に来館した入館者も多数いたと思われる。また、1回目のトークショーの前には市長の挨拶があり、特別なイベントであることを観客に印象づけた。

なお、本事業を実施する際に必要な「さかなクン所属事務所との交渉」「CMによる事前告知」「当日の司会者派遣」などの業務は、株式会社新潟テレビ21(UX)へ業務委託した。

(7) 専門的な調査・研究等について

[総括]

「鯨類の繁殖生理に関する調査」「鯖脚類の繁殖生理に関する調査」等、飼育水族に関する様々な調査研究を行っている。また、「漂着生物調査」「地域生物調査」等、野生水族に関する調査を行い、地域の自然史に関する知見の蓄積に努めている。

日本動物園水族館協会の会議や研修会へ出席し、積極的な調査研究成果を発表する共に、最新情報の交換等を通して飼育技術の一層の向上を図っている。また、日本動物園水族館協会種保存委員会との協力体制を維持し、絶滅の危機に瀕している種の保存に努めるとともに、調査研究を行っている。

これらの様々な研究の成果をホームページで公開する等、新潟における水辺の環境・水生生物についての情報の収集・発信基地としての役割を担っている。

機会をとらえ、特定外来生物が生態系に与える影響や、絶滅が危惧されている希少種についての情報を積極的に発信。特定外来生物のカミツキガメが7月に鳥屋野潟で確認された際には、地元紙(新潟日報)を通して、カミツキガメが希少な水生生物に与えるダメージについて訴えた。また、絶滅危惧種に指定されているオサガメの死骸が12月に聖籠町の海岸に漂着した際には解剖を実施し、死因の追及及び生態の知られていないオサガメの生育過程や行動パターンを知る手掛かりとし、今後の研究に役立てていくことを報道発表した。

今後も、より一層専門的な調査・研究に努め、その成果を市民へ還元していくように心掛けていきたい。

(8) 総合学習の受け入れ状況について

[総括]

文部科学省の提唱に基づく学習支援活動としての「総合学習」の受け入れを行っている。質疑応答やキーパーエリアガイドを通して、子供たちに生き物や環境に関する知識を伝える場となっている。

キーパーエリアガイドは、人数を制限し、時間をずらして対応する等、安全に配慮して実施した。

来館した児童・生徒から、多数の礼状や、「魚の種類の組み合わせ、展示のレイアウト、波を機械で作るなど展示するための沢山の工夫があることが分かった」「水をきれいにするためのろ過装置の大きさにびっくりしたが、その装置のおかげで10年以上も長生きをしている魚がいることを知った」「飼育する上で、餌の選択や調理の仕方、水温の調節や光の工夫なども必要なことを知った」「シナイモツゴやホトケドジョウなどの絶滅しそうな生物がいること、それを水族館が保護していることを学んだ」「海を大事にして、海洋生物の現状について考えなければならないと思った」「命の大切さを学んだ。これから命の大切さについて考えていこうと思います」等の感想が寄せられている。

「職業に対する関心を高める」「職業・職種の内容や働く意義について考えを深める」ことを目的とした「職場訪問」といった目的の総合学習も多かったことから、「飼育員さんたちの努力で元気な生きものが見られるのだと分かった」「仕事の大切さややりがいについて教えてもらい、『私たち自身が未来に向かって頑張らないと』という気持ちになった」「マリンピアには大きな水槽が非常に多く、大きな機械もたくさんあるので、働く人たちが協力しないと仕事が円滑に進まないということを知った」「水族館はたくさんの仕事の一つひとつ集まってできたもので、全てが大切な仕事なのだということがわかった」等の感想も寄せられている。

子供達にとって、水族館や水族への関心を呼び起こす機会・環境保全について考える機会として、また、社会に目を向け、働くことや学ぶことの意義や大切さを理解していく場として、非常に役立っていることから、今後も可能な限り受け入れを行っていきたい。

(9) 実習生等の受け入れ及び講師派遣の状況について

[総括]

実習生等の受け入れとして、大学生および専門学校生を対象に「飼育実習・研修」「博物館実習」を行った。これは、博物館類似施設としての一面を持つ水族館として、大学生・専門学校生に実習の場を提供するという社会的貢献の側面はもちろんのことであるが、指導を通じて職員の自己研鑽の場ともなっているので、今後も継続して受け入れを行っていきたい。

また、アウトリーチ事業の一環として、様々な「場」への講師派遣を積極的に行った。内容は、大きく分けて「野外での観察等の指導」と「教室（屋内）での生物や仕事についての講義・指導」であるが、対象が小学生から一般、学校教諭と幅広く、また、派遣先のニーズに合わせた内容にする必要があることから、派遣職員の指導者としての専門性が要求される取り組みとなっている。

毎年度継続して実施している臨海実習については、海洋フィールドを題材にできる貴重な教育学習機会であることから、今後も継続して指導者を派遣していきたいと考えている。

平成21年度に引き続き、関川村地域でシナイモツゴの保全に取り組む保護団体の観察会に職員を派遣し、地域とのつながりをより深める事ができた。

今回、初めて放送大学の授業へ講師を派遣したが、大変好評であった。実施後、担当教官と話をしたところ、今後もつながりを持っていきたいとの認識で一致した。

10月に行った南中野山小学校2年生へ出張授業は、7月の小学校教育研究協議会の研修に参加した教諭からの依頼で実現したものである。このような連鎖的なひろがり是非常に重要と考える。

今後も、実習生受け入れやアウトリーチ事業を地道にそして積極的に行っていくことが、水族館と地域・社会とのつながりを強固にし広げていく基礎となると考え、継続していきたい。

(10) 市民ボランティアの活動の状況について

[総括]

ボランティア活動の目的を大きく「水族館（専門家）と来館者（非専門家）をつなぐ役割」「生涯学習の場」「自己実現の場」の3つとして活動をサポート、コーディネートした。

平成 22 年度の活動の柱として「館内案内」「いきもの教室の補助」「職員とのワークショップ（初めて実施）」「研修」を設定した。

「館内案内」では、来館者との直接的な交流だけでなく、館内で気づいたことを活動日誌に記入して貰うことによるフィードバックを行うことで、来館者と水族館を間接的につなげる役割も担った。

「いきもの教室の補助」では、教室参加者との交流だけでなく自らの学習にもなることから毎回多数のボランティアが活動した。また、いきもの教室の終了後に行う担当職員とのミーティングの内容が次の教室で反映されることもあり、運営への参加の実感を得ることができている。なお、教室参加者へのアンケートには「スタッフだけではなくボランティアの協力により成立していることが、とても素晴らしいことだと思う」「スタッフやボランティアの方々の気配りがとてもよかった」といった声が寄せられている。

「職員とのワークショップ」は 3 回行い、連続的な内容とした。理想的な水族館にするためにまず今できることは何か、というテーマで話し合った。ボランティアにとっても職員にとっても刺激になり有意義な時間となったと考えている。今後、ここで話し合われたことを具体化するプロセスにもボランティアとの協働が重要になってくると考えている。

「研修」として、新規応募者研修（3 回）とクラゲ標本作り研修、視察研修（アクアマリンふくしま）を行った。新規応募者研修を既存メンバーへのリカレント研修の場（希望者のみ）と設定し、参加を呼びかけたところ毎回 8-10 名の参加があった。また、クラゲ標本作りはいきもの教室の人気プログラムであることから、同プログラムを行う際、今回研修に参加したメンバーが核となることで参加者へのサポートがより充実することが期待できる。この他にも、アクアマリンふくしまや郡山ふれあい科学館のボランティアとの交流ではボランティアとしての姿勢など多くのことを学ぶことができ、活動への刺激となった。

平成 22 年度も新規募集を行ったことでメンバー層に厚みができた。登録者数は 9 増えて 44 人となった。今後とも、水族館、来館者、ボランティアの 3 者が満足できる活動を推進し、持続的なボランティア活動を目指していきたい。

（11） 広告宣伝について

[総括]

広告や広報を広い意味での PR（パブリック・リレーションズ）活動と考えると、平成 22 年度は。まさに市民（広義の）との関係を上手く構築するにはどのようなアプローチをすべきか、という事を深く考えさせられる年となった。

年度当初の計画では、平成 22 年度は開館 20 周年を迎える年であることから、20 周年を前面に押し出して広報・広告を実施することとしていた。同時に、内容を自由に設定できるものに関しては、切り口を「水族館での過ごし方や観察の仕方などを提案する」提案型として作成するようにした。

しかし、6 月 18 日に起こしてしまった日本海大水槽展示魚類等の大量死亡事故による負のイメージが非常に大きいため、事故以降は、開館 20 周年関連広告・広報と並行して、この負のイメージを改善するため、「おわびと感謝」の気持ちを表現するための復興イベントの企画とその広報にも力を注いだ。

以下、テレビ CM とラジオ CM、クーポン付折り込みチラシ、雑誌などの紙媒体への広告、WEB、開館 20 周年広告・広報、大水槽復興イベントの企画・広報、広報 についてそれぞれ総括する。

テレビ CM とラジオ CM

テレビ CM は例年通り 4 月末から 9 月にかけて新潟、山形、福島の民放全局で放映した。

制作については、例年通りコンペを実施したが、これまでのような自由提案のコンペではなく、館よりテーマを指定して行うコンペとした。館から指定したテーマは「クイズ形式」と「音（鳴き声）」である。テーマは、コンペの前に行った職員有志による CM 制作ワークショップで提案された企画を元に

決定した。これは、「館内で音をキーワードに観察すると今までと違った観察の仕方ができる」という提案型を採用したものである。平成 19 年度から平成 21 年度まで 3 年間継続し、評判の高かった「オリジナルCMソング」から大きく変更する事に対する不安感があったが、館内アンケートでの認知度調査では、平成 21 年度（CMソング）で平均 37.5%、平成 22 年度で平均 40.3%が「見たことがある」と答えていて、若干ではあるがCMの認知度は上がっていた。CM内容が大きく変わったことで「おっ？」と思わせる効果があったと考える。その一方で、CMソングのような盛り上がりは見ることができず、「見たことはあり、それなりに印象には残るが、そこまで」ということだったと思われる。ラジオCMは、平成 21 年度の 5 局（FM山形、FM福島、FM群馬、FM善光寺、FM新潟）に加えてFMポートでも放送することとした。FMポートはFM新潟と同様、新潟県全域をカバーしていることから、より多くの県民にアピールできたと考えている。

クーポン付き折り込みチラシ

クーポン付き折り込みチラシは、平成 21 年度同様GW前と夏休み前の 2 回実施した。折り込み地域は平成 21 年度のクーポン回収結果を踏まえ、埼玉県については効果のある地域への選択と集中を行った。それ以外の 5 県（新潟、山形、福島、群馬、長野）についても、より効果的になるように地域を選択した。クーポンの使用について、駐車場ナンバー調査から計算した県別入館者数を元に分析した結果、GWを含む 5 月では埼玉以外の 5 県から来たと思われる入館者の 2 割から 3 割がクーポンを使用していると予測された。埼玉県についても 1 割強の入館者が使用しているという分析結果となった。このように、クーポン付き折り込みチラシは非常に効果的であることから、折り込み地域を精査しながら今後も継続していくつもりである。

雑誌などの紙媒体への広告

雑誌などの紙媒体への広告は昨年度実績をベースにしつつ、新たな媒体への出稿も実施した。ナショナルジオグラフィック日本版 8 月号別冊への 1 ページ広告は、別冊の特集内容が「海洋環境」であったことから、海洋環境に関心のある成人に対するピンポイントのアピールになったと考えている。また、この別冊発行を記念して 8 月に行われた海洋についてのシンポジウム（東京で開催）で、マリンピア日本海のポスター掲示および夏期特別展パンフレットの配布を行うことができた。

WEB

ホームページについては、今まで以上に更新頻度をあげるようにして、常に最新の情報を発信することを心がけた。また、パスポート利用者を意識して、特に「いきもの観察情報」のこまめな更新に努めた。現在のホームページを新規に作成してから 6 年以上経過しているため、見た目の古さだけでなく、使い勝手を含めた設計もかなり古くなっているのが現状である。そのため、平成 23 年 3 月発注でトップページの新規作成を含めたホームページのリニューアルをすることとした。

開館 20 周年広告・広報

開館 20 周年の広告・広報を統一感のあるものとするために、開館 20 周年記念のロゴをデザインした。平成 22 年度の統一広告やホームページなど、表示することが可能な媒体には全てこのロゴを表示した。開館 20 周年記念セレモニーでは、事前に報道各社に開催を連絡していたため、各テレビ局および新聞社が取材に来館し、当日（新聞は翌日）報道された。

また、新潟市が事業主体となった広告・広報活動を多数行った。特に、広報課が事業主体となって実施した市報にいがたでの「20 周年記念夏期特別展連載記事」と「開館 20 周年特集記事」、文化政策課が実施した「新潟市文化広報 開館 20 周年記念特集記事」については情報量も非常に多く、マリンピ

ア日本海を取り上げてくれた各事業主体に感謝したい。

大水槽復興イベントの企画・広報

大水槽の事故を起こしてしまったことについての反省と感謝の気持ちを表すため、8月に「わくわくドキドキ日本海大水槽」という統一タイトルの元、多数のイベントを開催した。このイベントを広報するためのチラシを作成し、新潟市内を中心に新聞への折り込みをした。また、このイベント群の中の「ホシエイの子供の命名セレモニー」では事前に報道各社に開催を連絡していたため、各テレビ局および新聞社が取材に来館し、当日（新聞は翌日）報道された。

広報

ここでは、いわゆる「広告料」を必要としない誘客・宣伝活動も「広報」と位置づけることとする。平成22年度は雑誌などへの情報提供を81件行い、その全てでマリンピア日本海の情報に掲載された。これは、タウン情報誌などの「インフォメーションコーナー」への主体的な情報提供や、旅行雑誌の記事中での紹介というもまでのまですべての形式が含まれる。いずれにせよ、これまでの繋がりによって掲載可能となったものも多いことから、いろいろな媒体との繋がりを保ち続けることが非常に重要である。また、テレビやラジオへの出演も多数行った。テレビは「情報伝言板」のような1-2分程度のものが多いが、ラジオの場合は番組内でのゲストとして出演する機会が多いので、時間も5-10分と長く、沢山の情報を伝えることができ、広報として非常に有効と考えている。

また、特別展などの展示イベントや動物輸送など展示外での活動について、報道機関へのリリースを積極的に行った。報道機関への情報のリリースは、上記の広告・広報と違い、取捨選択の自由は報道機関にあるため必ず報道されるわけではないが、それゆえに報道された際の「情報の信頼度」や「広がり」は他の媒体には無いものである。しかし、その一方で編集権が報道機関にあるため、こちらの「伝えたいこと」に必ずしもならない事がある。「伝えたいこと」を正確に取り上げて貰えるような「情報提供の仕方」が重要であるので、今後ともこの点に気を配りながら積極的に情報を提供していきたいと考えている。

(12) 友好館提携を結んだアクアマリンふくしまとの協力について

[総括]

平成19年11月23日に友好館提携を結んだアクアマリンふくしまとは、活発な生物交換、両館の市民ボランティアの交流等、さまざまな方向で友好館提携の効果が現れている。

平成22年6月18日に起こしてしまった日本海大水槽展示魚類等大量死亡事故で、7,000点もの魚類等を死亡させてしまった際に、アクアマリンふくしまからは事故直後から多数の魚類を輸送・譲受してもらった。そのおかげで1週間で正常展示を復旧することができた。

市民ボランティア活動では、アクアマリンふくしまのボランティアが11月に来館、マリンピア日本海のボランティアが3月にアクアマリンふくしまを訪れ、ボランティア活動状況の情報交換等を行い、交流を深めた。

平成23年3月11日に発生した東日本大震災で、アクアマリンふくしまは壊滅的な被害を受けてしまった。哺乳類と鳥類は(社)日本動物園水族館協会が関東方面へ避難させたが、魚類の大半が死亡するに至った。そうした中、3月28日にアクアマリンふくしまから、僅かに生き残った魚類をマリンピアへ緊急避難させてほしいという要請を受け、4月1日に魚類等20種164点を当館に収容した。

1日も早いアクアマリンふくしまの復興を願うとともに、復興のためのできる限りの支援・協力を行っていききたいと考えている。

アクアマリンふくしまから預かった生物を大切に飼育し、福島の方へお返ししたいと考えている。

(13) 年間入館パスポートについて

平成 20 年 4 月 1 日より発売開始

大人(高校生以上) 3,500 円、小人(小・中学生) 1,300 円

平成 21 年 4 月 1 日より幼児用を新たに発売開始

幼児(4歳以上未就学児) 400 円

[総括]

展示生物の継続的な観察の機会を低い経済負担で提供できる方法として、平成 20 年 4 月より「年間入館パスポート(パスポート)」を導入し(当初、大人用と小人用のみ発売)、平成 21 年 4 月からは幼児用も発売を開始した。

入口・受付の構造がパスポート販売に適していないため、多客時の販売場所の確保が難しい状態である。多客期については、パスポート料金の収納までを受付が担当し、別室で職員が説明、写真撮影、データ登録、パスポート発行を行ったが、レクチャールームを臨時パスポート受付会場として利用すると、会議や作業等に利用できるスペースがなくなること、事務室から離れた場所に職員を常駐させなければならず、日常業務の効率が悪くなるといった弊害が生じている。リニューアルによって改善が図られることを切に願う。

パスポート購入者は 3,431 人(総入館者の 0.7%)、パスポート利用者(購入者+リピーター)は 19,894 人(総入館者数の 1.3%)であり、パスポート利用者の平均入館回数は 5.8 回であった。

毎月実施しているアンケート調査で「子どもが生き物に興味を示しているので、月 1 回程度は来館したい」「パスポートの料金が非常に安い。次回も購入したい」「子どもの散歩にとってもよく、寒くなったらまた来ようと思う」「週 1 回とってもよいファミリータイムをすごさせてもらっている」「前回よりペンギンの赤ちゃんが大きくなって」「サケの成長が見たくてパスポートを購入した」等の声が寄せられている。アンケート調査での「生物の変化を発見できたか」との問いに対して、約 54%の人が「発見できた」と回答しており、「新鮮味が感じられる・季節感のある展示」を心掛けてきたことが、ある程度評価されたと考えている。

また、「次回のパスポート購入予定は」との問いに対しては、「購入の予定なし」と答えた人が 4.6%で、約 71%の人からは「購入したい」と回答してもらうことができた。

今後も、生物の成長や変化が体感できる展示等を心掛け、リピーターにも十分満足してもらえるようにしていきたい。

(14) リニューアル基本設計策定への協力について

[総括]

水族館のリニューアルに向けて、開館準備及び開館当初からの運営経験を基に、市に対して専門的見地からの助言・提案をここ数年継続的に行っている。

平成 22 年度は、平成 21 年度に策定された「新潟市水族館リニューアル基本計画」を受け、実現の可能性や運営内容をさらに発展検討する「基本設計」の年であったことから、従前にも増して、市の担当部門(文化政策課・公共建築第 1 課)や設計事務所との連携を密に図り、実態に即したより具体的な助言や提案を行った。

平成 23 年度は、他の水族館の運営等にも造詣が深い館長を中心に、職員が一丸となって取り組み、市民の皆さんに喜んでいただけるリニューアルになるよう、市と協力し、リニューアル実施設計策定の一翼を担っていきたい。

(15) 市・他団体等との協力

[総括]

平成 22 年度は市・他団体等と協力して実施する事業が非常に多かった。

開館 20 周年を記念して市が事業主体となって展開した事業は多岐に渡り、市の施策の中におけるマリニピア日本海の位置付けについて体感できた貴重な年度であった。事業内容的にも、他施設・他団体の協力が不可欠であり、指定管理者だけでは到底なしえなかったサービスを展開できたと考えている。準備期間が十分に取れなかったため、見切り発車した部分も多々あり、実際の運営に関して細かいトラブルや苦労はあったが、多くの市民から楽しんでもらい、満足してもらえたと思う。

3. 入館料収入の実績について

平成 22 年度入館料収入 388,478,216 円

[総括]

入館料の徴収事務については、協定書に基づき適切に実施した。

E T C 割引や大観光交流年における一連の行事等の影響を受けた平成 21 年度と比較して、入館料収入は大幅に減少した。(83,745,222 円減、対前年度比 82.33%)

6 月 18 日に起こしてしまった日本海大水槽展示魚類等の大量死亡事故時に、「マリニピア日本海のメイン水槽である日本海大水槽が復旧する間」及び「無料入館期間終了の周知期間」である 6 月 19 日から 6 月 24 日の 6 日間を無料入館としたことが、入館料収入減少の一番の要因である。

無料入館期間中、44,030 人もの入館者があった。マリニピア日本海への潜在的来館者がそこに集中してしまったことで、その後の入館者数減・入館料収入減につながったと考えている。

客単価は 843 円と、平成 21 年度と比較して 122 円も下がっている。

無料入館期間中、非常に多くの市民からご来館いただき、マリニピア日本海へのニーズの高さを再認識することができたが、無料入館を実施したことによる入館料収入の損失等、市ならびに市民の皆さんに非常に多くの負担を負わせてしまった。

市民の貴重な財産を失ってしまったこと、新潟市水族館というブランド及び信頼に傷をつけてしまったことで、市民の皆さまに多大なご迷惑をおかけしたことを深く反省している。

その上、3 月 11 日に「東日本大震災」が発生し、その後地震に伴う「東京電力福島第一原子力発電所事故」「計画停電」等により、入館者数が激減した。3 月 11 日以降の入館者数を過去 3 力年の同時期同曜日と比較すると約半数となっている。地震の発生が、「春休み」というある程度の誘客が見込める時期の直前であったこと、来館が見込まれる近県が被災したことで、3 月の入館料収入は平成 21 年度の 54.3%、平成 20 年度の 51.1%となってしまった。

未曾有の災害であったこと、原発の事故が収束していないこと、被災エリアが広範囲に渡ること、広範囲で余震が続いていることなど、あまりにも不確定要素が多く、今後の入館者数及び入館料収入を推測していくのはかなり困難である。

なお、パスポート購入者の 1 人当たりの入館回数が 5.8 回と、平成 21 年度の 5.3 回より増加していることも、入館料収入減の要因の一つとなっている。

入館料の免除については、新潟市水族館条例・施行規則に基づき適切に実施した。

日々、減免業務を行っている指定管理者として、『『児童相談所』で一時保護した児童及び引率者について全額免除の扱いにできないか』、『『適応指導教室』に通室している児童又は生徒及び引率者について『特別支援学級』と同様の扱い(全額免除)にできないか』等、条例・施行規則からこぼれ落ちてしまうケースについて拾い上げ、時代に合った減免について市に提案を行っている。

減免に関しては、児童福祉法、障害者自立支援法等関係する法令を読みこなす能力が必要であり、実務を行ってなければ分からない部分も多いことから、今後も社会のニーズを的確に把握し、新たに対象とすべき事由があれば、必要に応じて市へ提案を行っていききたい。

4. 管理経費等の収支決算について

[総括]

6月に起こしてしまった「日本海大水槽展示魚類等の大量死亡事故」については、約7,000点の魚類等を失わせてしまったが、友好館提携を結んでいる「アクアマリンふくしま」をはじめ他園館から、数多くの魚類を寄贈して頂いたことで生物購入費に多くの残が生じた。事故発生翌日から、市からの指示で土・日を挟む6日間無料開館を行い、来館者がゴールデンウィーク並みに増えた。周辺道路の混雑解消のため警備員を増員したことにより追加で経費を支出した。施設管理を怠った責任として、事故後の死魚埋立処分やバスポート会員への謝罪文送付等の費用は指定管理者である当財団が支出した。また、同月に発生した「イルカ機械室内ポンプピット冠水事故」においても、復旧費用を指定管理者が支出したものの、これら2つの事故の対応で時間外勤務手当の支出が多くなってしまった。

平成20・21年度に施設・設備の老朽化や損耗が激しかった箇所で行った工事・修繕を行ったため、平成22年度については、前年度に比べ件数・経費が少なく済んだ。ただし、今後もリニューアルまでの間、突発的な故障により、経費が嵩むことは十分考えられる。12月には海水取水設備の着水槽に砂が溜まったことにより、通常の運転が出来なかったため、緊急的に排砂作業を行った。経費は協議した結果、市に負担してもらった。取水設備は水族館の生命線であることから、来年度以降は春・秋季の年2回行っていた保守点検に冬季を追加し年3回とする。これに伴う変更契約で契約額が約140万円増額されることとなるが、過去にも不具合解消に多額の費用を要していることから必要な経費だと考えている。

コ・ジェネについては、長期計画を立てて保守点検を行っているが、部品単価が高いことから、交換予定時期になっても予算措置されず、保守点検計画が後送りになっているのが現状である。故障した場合の修理費が高額のため機械保険に加入をしているが、過去に大規模な故障をした際に「修繕費は指定管理者、保険金の受取は新潟市」という復旧するための修繕費に直接充当できない不合理な状態に陥った。リニューアル後はコ・ジェネを撤去する予定ではあるが、工事が始まるまでの間は従来通り運転しなければならず、今後また故障しないという保証がないことから、保険金の受取者と修繕費の支払者を同じにする等、行政内部での調整を昨年に引き続きお願いしたい。

コ・ジェネの運転燃料として使用しているA重油については、平成22年12月までは概ね1リットル当たり50円台を推移していた単価が、中東情勢の悪化から上昇傾向に転じ、平成23年4月の後半には82円/リットルとなっている。情勢が未だに不安定なことから、今後の価格推移は不透明である。

A重油経費は指定管理料の1割以上を占めていることから、その価格の変動は指定管理料を圧迫する大きな要因となっており、計画的な執行を阻害している。

マリニア日本海のオープン時に導入した券売レジシステムを20年ぶりに更新した。以前から入館者より「記念に保管できるようなチケットがほしい」等の要望があり、また機器が古すぎて部品の調達が出来ず、いつ壊れてもおかしくない状態であったため、かねてから予算要求をしてきたことが実り、市の負担でようやく平成22年度末に更新することができた。以前の食券のようなチケットから、来館者が記念に残せるようなチケットに変更することができ、市民サービスの向上が図られたと考えている。今後はチケット作成経費がかかってくるが、これは入館者サービスの一つとして当然のことであると考えている。

水族館管理経費の内、粹配経費については、購入する消耗品やパンフレットの郵送代の再検討、委託やリースの見直しなど細々としたことを積み重ね経費削減に努めた。さらに「東日本大震災」による東北電力管内での電力不足解消のため節電にも努めた。しかし、物価の高騰（特にA重油の高騰）やリニューアルまでの間であっても、施設・設備の老朽化による突発的な不具合で維持補修経費を要することは避けられない状態であり、現在のレベルを維持した管理を行っていくことは、非常に難しいと感じている。今後も、リニューアルを見据え、さらなる経費削減には努めながら、収入（入館料収入）に見合った執行を心がけていきたいと思う。

5. まとめ

ETC 割引や大観光交流年における一連の行事等の追い風を受けた平成 21 年度と比較して、入館者数・入館料収入ともに減少に転じ、入館者数はかろうじて事業計画の目標値を上回ることができたが、入館料収入は事業計画の目標値をかなり下回ってしまった。

6 月 18 日に起こしてしまった日本海大水槽展示魚類等の大量死亡事故時に、マリニピア日本海のメイン水槽である日本海大水槽が復旧するまでの間、水族館として不完全な状態で開館することとなったため、「マリニピア日本海のメイン水槽である日本海大水槽が復旧する間」及び「無料入館期間終了の周知期間」である 6 月 19 日から 6 月 24 日の 6 日間を無料入館としたことが、入館料収入減少の大きな要因であると考えている。入館者数については、無料入館期間中、44,030 人もの入館者があつたことにかろうじて目標値を上回ったが、マリニピア日本海への潜在的来館者がそこに集中してしまったことで、その後の入館者数減にもつなぐたと考えている。

今回の事故は 20 年間の負の積み重ねが表面化した事象であり、これまでの 20 年間漫然と業務を行ってきた部分があること、業務への取り組みに対する甘えを容認してきたことの結果だと考えている。これらを見落としてきた結果、深刻な事態に至り、市ならびに市民の皆さんに非常に多くの負担を負わせてしまったことを深く反省している。

事故後、指定管理者として事故を検証し、関係者の処分を行うと同時に、再発防止策の策定・実施、各種マニュアルの作成・実行、中堅職員に対するリーダー研修会等を実施した。また、市民の皆さんから多数寄せられたお叱りと激励へのお詫びと感謝の気持ちを込めて、夏に「わくわくドキドキ日本海大水槽」、秋には「お泊り水族館」「さかなクントークショー」等を実施した。

市民の皆さんからのお叱りや励ましのメッセージ、また事故後に実施したイベントを通して、いままで以上に市民との交流を図ることで、改めてマリニピアが市民に支えられて存在しているということを痛切に感じた。事故を教訓に初心に戻り、今後二度とこのような事故が起こらぬよう細心の注意を払って業務にあたり、職員が一丸となって頑張っていこうと再出発を誓った。来館者の笑顔が一番の励みであることから、ひとりでも多くの方からご来館いただき、楽しんでいただけるよう心掛け、一日一日の業務を大切に行っていきたい。

なお、3 月 11 日には東日本大震災という未曾有の災害が発生したことも、入館者数・入館料収入の減少に拍車をかけたと考えている。

この災害に際し、市が設置している避難所に避難している人をバスで送迎して当館に招待できないか等について、早い時期から市に提案を行った。また、東北電力エリアの電力不足を受け積極的な節電策を講じる等、当館の果たすべき社会的役割を意識して行動した。

リピーターの確保を目指し、平成 20 年 4 月からパスポートの販売をスタートした。平成 22 年度のパスポート購入者数は 3,431 人と減少傾向にあるが、パスポート購入者のリピート回数は増加しており、1 人平均 5.8 回（平成 20 年度 4.6 回、平成 21 年度は 5.3 回）も来館してもらうことができた。パスポート利用者の入館回数が多くなれば多くなるほど、入館料収入に結びつかないといったジレンマはあるが、生物継続観察の機会を低い経済負担で提供できるといった目的は十分に達しているのではないかと思う。

施設については、多客時における駐車場不足、バリアフリー対応の不足、見学を念頭に置いていないバックヤードの造り、繁殖や保護・治療のための予備施設の不足、図書・資料・標本等を配した情報コーナーの未整備等、多くの課題を抱えている。海岸側臨時駐車場（ブロックヤード）の管理については、「みなとトンネル」開通後、水族館の来館者客以外の駐車車両が一層増加し、年々治安が悪化している。一般利用が定着し、いつ重大事故が発生しても不思議ではない状況だが、海岸保全区域内の公有財産を使用承認を受けて活用している土地であり、指定管理者単独による管理は非常に困難になってきている。今後の方針について行政全体としての判断を早期に下されたい。また、開館から 19 年を経た現在、施設・設備の老朽化や損耗が激しくなっている。特に取水設備については国土交通省の養浜工事の進展により、沖合 200m の取水口付近の着砂がここ 1 年で非常に顕著になっている。応急措置的な排砂作業・工事を繰返してきたが今後、最悪の場合は配管が砂や河川

由来の有機物により完全に閉塞する恐れがある（隣接の日本海区水産研究所は今冬完全に閉塞）。水族館の生命線である海水（量）の調達が困難となる可能性が高いことから、取水システムの再検討が急務となってきている。

予算上の制約はもちろんのこと、躯体・設備等構造上の制約もあることから、それら全てがリニューアルによって解消されるわけではないが、市民サービスの向上が図られるよう、市の担当部門（文化政策課・公共建築第1課）や設計事務所との連携を密に図り、実態に即したより具体的な助言や提案を行っていきたい。

ソフト面については、「いきもの教室」「バックヤードツアー」「ペンギンガイドツアー」「サマースクール」等、教育的効果の高いプログラムの充実を図っているが、教育効果に重きを置けば置くほど、定員を設けた企画にならざるを得ないのが現状であり、入館者を大きく伸ばす要因とはなっていない。

平成26年には北陸新幹線全線開通も控えており、リニューアルによる新たな魅力づくりは急務であると考えている。

リニューアル後の事業展開や運営を踏まえ、リニューアル後のソフト部分を実現していくために必要な準備のピックアップ、準備スケジュールの策定、担当のシミュレーション、実現のための諸問題の整理・解決方法の検討等を進めていきたい。

検討できる時間は短く、検討が必要な内容は多岐に渡っているが、「水族館業務を行う専門家集団」としての力量が試される時と自覚し、平成2年の開館当初から培ってきた豊富な知識と経験を生かし、市に協力してリニューアルを成功させたい。多くの市民から喜んでもらえるリニューアルになるよう、スタッフが一丸となって頑張っていきたい。